

「磯船しほし手毎にれち瓜蒴子」と吟じた。
松室庵は蓋世に少幻庵とせられるもの。
イツセン 一川 ↓タケムライツセン 竹村一川。

イツソウアン 一草庵 金澤高麗寺の塔頭であつた。寛永年開山密慶の創立する所。後破却して絶えた。延寶六年十一月二十一日高麗寺普門から傳燈寺に届出た書類に、『金澤庄宮腰道松山高麗寺塔一草庵、右之塔頭寛永年中に當寺開山密慶和尚致建立置候得共、當寺地内に御座候。』とある。

イツソウテイ 一草亭 藩政の頃金澤に在つた料理店。廣瀬旭莊が安政七年(萬延元)三月こゝに遊んだ記事に、『左に溪流を見る。曰く淺野川。廣さ五十間可り、岸に青松を列ね、三町北折して板橋を渡り、溪右にして東行す。人家岸上に列る。地急に上る五六十歩、即ち一草亭なり。』とある。板橋は勸進橋だから、後の天神坂を稍上つた所にあつたと思はれる。明治になつては御歩町に一草亭といふのがあつた。

イツソングテ 一村建 ↓ブンケ 分卦。イツテツ 一鐵 石川郡白山村の刀鍛冶で、通稱與助。その銘は白山之住一鉄とも、つるぎの住一鉄とも、しら山のふもとツルキ住一鉄、白山露木住一鉄とも又は一鉄與助など種々ある。その居地と傳へるは、神主町から上、吉野往來の側川縁である。一鉄の鍛刀は一代限りで、その子孫は鶴來で平右衛門鍛冶と異名せられる野鍛冶であつた。

イツトウダイギユウ 一統大牛 金澤寶圓寺廿九代の住持。生國は肥後、文政四年正月十一日江州中宿蓮泉寺より進山し、七年六月

七日現住中遷化した。
イツボンキバナ 一本木鼻 鹿島郡能登島須曾の南方にある岬。

イツボンバシ 一本橋 江沼郡大聖寺の本橋町に在つた。江沼志稿に板橋長さ三間二尺七寸幅六尺。往昔は百姓の造つた獨木橋であつたから、一本橋といつたとある。

イツボンマツ 一本松 金澤の町名。もと石川郡笠舞村に屬した地で、元祿九年の地子町肝煎附に笠舞一本松と記されてゐる。又小立野一本松ともいつて卯辰山の一本松との混同を避けたが、今は單に一本松といふことになつた。續漸得雜記に、昔は小立野の方片側のみ家が並んでゐたので、一方町といつたのを、後に唱へ誤つて一本町或は一本松などと呼んだとの傳説を載せてあるが、果して然るや否やは明らかでない。

イツボンマツ 一本松 河北郡卯辰山にあつた巨松。越登賀三州志に、井上勘左衛門は初め前田利家に仕へたが、文祿中流浪し、慶長五年淺井慶合戦の比は太田但馬に仕へ、明年鎗功を以て再び公臣となり、千三百石に至つた。彼の一本松はこの勘左衛門の灰塚に植ゑたものであるとある。句空の草庵集に、『一本の松をちからや霞公 北枝』とあるも是である。明治廿三年二月廿三日午前十一時頃遊山客の焚火によつて焼出し、廿四日午後一時に至つて全く灰燼に歸した。

イツボンマツ 一本松 鳳至郡浦上の内なる正佛の小字。

イツミ 泉 石川郡富樫庄に屬する部落。加越能舊跡緒に、『泉領の内に館と申所有り。木曾義仲陣所の由申傳ふ。今は作食蔵に成り

有る』とある。
イツミカチ 泉鍛冶 前田利長の時、刀工で金澤の郊端泉の地に住してゐたものを泉鍛冶といふた。又利長の書翰に富山の泉鍛冶と書いてあるのは、泉鍛冶の中富山に移住したものを指すのである。清光一派は泉鍛冶であつたが、泉鍛冶は清光一派のみには限らぬであらう。

イツミジンジャ 出水神社 江沼郡橋立に鎮座する式内社。皇年代略記に、曆仁元年加賀泉社火ありといふものは是である。舊傳に往古は泉之瀨といふ海岸に鎮座したが、社地波瀾の爲に崩壊したから、今の泉山に遷座せしめたといふ。中頃泉之社又は御山之社と號したことがあり、明治五年更に山崎一名蛭場の山に移した。但し別に異説がある。加賀志徴にいふ。白山本式社考等に出水神社を大杉村に在るとあるが、この大杉は江沼郡小杉の誤であらう。小杉の隣邑には生水村があるから、社號はそれに因つて生じたのであらうと。

イツミシンマチ 泉新町 金澤の町名で、泉町から南方をいふ。俗に新町とも出町とも稱する。このあたりは延寶の頃にはまだ家屋のない郡地であつた。

イツミタカイヘ 泉高家 尊卑分脈に、富樫次郎家道の三男三郎家經の弟泉四郎高家が、高家は石川郡富樫庄泉村に居住したのであらう。

イツミテラマチ 泉寺町 金澤の町名で、本名を泉野寺町といふ。元和の初古寺町等にあつた寺院を泉野の地へ移して泉野寺町と名づけた。然るに元祿の前から泉野寺町のうち野田道なるを野田寺町、鶴來道なるを泉寺町

と稱するに至つたものである。
イツミノ 泉野 石川郡富樫庄泉野・泉西泉・米泉・泉野新・泉野出・泉野十一屋及び五ヶ庄増泉に至る間は一體の廣野で、之を泉野と總稱した。今金澤の野町・泉寺町・野田寺町もその野の中で、一面野田・長坂の山麓にまでも及んでゐたと見える。

イツミノ 泉野 石川郡富樫庄に屬する部落。

イツミノシオキバ 泉野仕置場 慶長十九年不破彦五郎召仕の少女が、彦五郎の妻に毒を與へたによつて、泉野で火刑に處せられ、元和四年陀羅尼鍛冶六蔵等は密通によつて泉野に於いて釜煎の刑に處せられ、同八年足輕柳原文蔵が衆道の事によつて金澤泉野で牛裂に行はれた等のことがある。此等は石川郡富樫庄泉野村の地内であらう。後世泉新町と有松町との地境に仕置場があり、それも舊と泉野の内だから、最初からこゝであつたのかも知れぬ。

イツミノジュウイチヤ 泉野十一屋 ↓ジュウイチヤ 十一屋。

イツミノシン 泉野新 石川郡富樫庄に屬する舊部落名。泉野新百姓とも泉野新田ともいうたが、天保中地黃煎村と改めた。

イツミノジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツミジンジャ 泉野神社 金澤野町に在つて野町神明宮ともいひ、古への泉野の内である。社記によれば、もと卯辰山の内摩利支天山に鎮座したが、讃岐といふ者之を小立野なる後の本多安房居屋敷の地に移し、更に野町に轉じたものゝ如くに見える。しかし小立野の神明は、後に觀音院の開山になつた祐慶が慶長元年十月伊勢の御師藤井與左衛門に

イツ